

生成 AI ではじめる！未来の知財お仕事入門

1. はじめに：AI と知財、こわくないよ！

皆さん、こんにちは！「AI(人工知能)」や「知財(知的財産)」と聞くと、なんだか難しそう、専門的で自分には関係ないかも…と感じてしまうかもしれませんね。でも、心配はいりません。

この資料の目的は、「生成 AI が、知財の仕事でいかに安全で強力なアシスタントになるか」を、誰にでも分かるようにやさしく解説することです。

これから紹介する AI 活用の基本は、たった一つのシンプルな考え方に基づいています。それは「リスクを最小限に抑えながら、小さな成功体験を積み重ねること」。このステップさえ押さえれば、誰でも未来の働き方を体験できます。さあ、一緒に新しい世界の扉を開けてみましょう！

では、その「リスク最小化」とは具体的にどういうことなのか、一番大切なルールから見ていきましょう。

2. 知財業務で AI を使うときの「黄金ルール」

生成 AI を知財業務で活用する上で、絶対に守るべき最も重要な基本方針があります。

リスク最小化の原則

それは、「公開済みの情報だけを AI に入力する」ことです。

これは、世の中にすでに出ている特許公報や学術論文などを AI に読ませるのは OK、でもまだ未公開の発明アイデアや社内の機密情報は絶対に入力しない(NG)、というルールです。

もっと身近な例で考えてみましょう。「図書館の本で調べ物をするのは OK、でも自分の秘密の日記を誰かに見せるのは NG」という感覚に似ています。このルールを守ることで、情報漏洩のリスクをゼロに近づけ、安全に AI の力を借りることができます。

この大原則に加えて、以下の 2 つの方針を心に留めておきましょう。

- **小さな成功体験の積み重ね**：いきなり全社で導入せず、部内限定で小さく始めて具体的な成果を可視化する。
- **2 つの成果を両立**：「効率化（工数削減）」と「高付加価値（新たな視点）」を同時に追求し、単なる時短にとどまらない価値創出を目指す。

特に重要なのが、仕事を「速くする」だけでなく、「賢くする」という 2 つの成果です。この AI がもたらす 2 つのスーパーパワーについて、詳しく見ていきましょう。

3. AI がくれる 2 つのスーパーパワー：「効率化」と「高付加価値」

AI 活用が目指す 2 つの成果、「効率化」と「高付加価値」には、それぞれどのような意味とメリットがあるのでしょうか。

概念	分かりやすい説明
効率化（工数削減）	「今まで 1 時間かかっていた作業が 15 分で終わる」など、同じ仕事をより速くこなす力。これにより、他の重要な仕事に時間を使えるようになります。
高付加価値（質的向上）	「人間だけでは気づけなかった新しい視点やアイデアを発見する」力。これにより、仕事の質が向上し、より戦略的な提案ができるようになります。

私たちの目標は、この 2 つのパワーを掛け合わせた「**目指す領域**」に到達することです。単に作業が速くなる「効率向上」だけでは、今までのやり方から抜け出せません。逆に、新しい視点を獲得「質的向上」だけでは、日々の業務に追われて実践が追いつ

きません。この 2 つを掛け合わせ、「より速く、かつ、より賢く」仕事をすることで初めて、知財業務の価値を根本から変革できるのです。

では、この 2 つのスーパーパワーが実際の知財業務でどのように使われるのか、具体的な 4 つの事例(ユースケース)を見ていきましょう。

4. AI 活用術をのぞいてみよう！具体的な 4 つの事例

4.1. ユースケース①: 競合分析のスーパーアシスタント

これは、まるで優秀な探偵のように「競合企業の動きを素早く丸裸にする」ための活用法です。

AI には、公開されている競合企業の特許情報を読み込ませ、「どんな課題を」「どんな技術で解決し」「どんな効果を得ようとしているのか」という発明の核心部分を自動で抜き出させます。

- ・ **効率化の効果**: 特許 1 件を読む時間が **1 時間 → 15 分** に短縮！
- ・ **高付加価値の効果**: 競合の技術が時間と共にどう進化したかという「トレンド」を抽出し、戦略的な分析資料をすぐに作れるようになります。

【AI への指示(プロンプト)例】 次の特許公報の内容を読み取り、①解決しようとしている課題 ②そのための技術的手段 ③得られる効果 を簡潔にまとめてください。

さらに、同一出願人が過去 3 年間に申請した同分野の特許と比較して、技術的な進歩点や差別化の要素を指摘してください。

このように、AI は特許を読む時間を短縮する(効率化)だけでなく、競合の戦略トレンドという新たな視点をもたらす(高付加価値)、まさに「賢い」相棒なのです。

4.2. ユースケース②: 未来のビジネスチャンスを探す探検家

これは、「技術の宝の地図から、まだ誰も見つけていないお宝(新しい市場)を探す」探検家のような活用法です。

AI には、たくさんの特許情報から「その技術が何に使えるか(用途)」をリストアップさせ、さらに「どの会社がどの用途に取り組んでいるか」が一目でわかる表(マトリクス)を作らせます。

用途 / 出願人	自社	A 社	B 社	C 社
医療診断装置	●	●		●
自動車センサー	●		●	●
環境モニタリング				

- ・ **効率化の効果**：手作業での用途整理にかかっていた時間が 半日 → 30 分に短縮！
- ・ **高付加価値の効果**：競合がまだ参入していない「有望な用途領域(ホワイトスペース)」を発見し、新しいビジネスのヒントを見つけられます。

上の表のように、多くの企業が「医療」や「自動車」に取り組む中、「環境モニタリング」という分野にはまだ誰も参入していないことが判明すれば、自社にとって大きなビジネスチャンスかもしれません。

【AI への指示(プロンプト)例】

(自社や競合の特定技術分野に関する複数の公開特許番号リスト)

1. 上記の特許群から、技術の「用途(応用先)」をすべて抽出しなさい。
2. 抽出した用途を「行」、出願人を「列」としたマトリックス表を作成しなさい。
3. このマトリックスから、まだ参入プレイヤーが少ない「有望な用途領域(ホワイトスペース)」を指摘しなさい。

ここでも、AI は調査時間を短縮する(効率化)だけでなく、誰も気づかなかった市場の穴を発見する(高付加価値)ための、強力な探検ツールとなるのです。

4.3. ユースケース③: 経営層に響く戦略アドバイザー

これは、「点と点だった情報(特許、論文、ニュース)をつないで、一本の未来予測レポートを作る」戦略コンサルタントのような活用法です。

AI には、特許だけでなく、最新の学術論文や市場ニュースなど、複数の情報源を横断的に分析・統合させ、会社の未来を決める経営層向けのレポートを作成させます。

- **効率化の効果：** 情報収集・分析・統合にかかる時間が **1 日 → 2 時間** に短縮！
- **高付加価値の効果：** 知財部門が専門家の言葉ではなく「経営の言葉」で会社に貢献できるようになり、部門全体の価値が上がります。

【AI への指示(プロンプト)例】

- A 社の最新公開特許(特開 2024-XXXXX)の要約
- 関連分野の最新論文(XXXX 学会)の要約
- 最近の市場動向に関するニュース記事

これらの情報を統合し、以下の 3 点で経営層向けに簡潔なレポートを作成せよ:

1. 最新の「技術トレンド」
2. 競合の「強みと弱み」
3. 今後の「事業インパクト」

このように、レポート作成を高速化し(効率化)、経営層の意思決定に直接貢献する(高付加価値)ことで、知財部門の役割そのものを変える力があるのです。

4.4. ユースケース④: 発明のアイデアを磨き上げる壁打ち相手

これは、**「新しい発明アイデアが本当に新しいのか、客観的な視点で評価してくれる頼れる相談相手」**としての活用法です。

AI には、自分たちが考えた発明アイデアと、世の中にある膨大な公開特許を比較させ、そのアイデアの「新規性」や「進歩性」の可能性を素早く評価させます。

- **効率化の効果：** アイデアの初期評価にかかる時間が **数時間 → 30 分** に短縮！
- **高付加価値の効果：** 個人の感覚ではなく、データに基づいた客観的な議論ができるようになり、発明の質そのものを高めるための時間が増えます。

この仕組みを導入することで、「ライバルになりそうな特許を早期発見できる」「より質の高い発明を生み出す議論に集中できる」といった大きなメリットが生まれます。

【AI への指示(プロンプト)例】

(自社の発明アイデアの概要)

この発明アイデアについて、関連する公開特許群と比較し、以下の点を簡易的に評価しなさい。

1. 「新規性」の可能性
2. 「進歩性」の可能性
3. 「事業的な利用可能性」 ※評価の根拠となった公開特許番号を併記すること。

単に調査時間を減らす(効率化)だけでなく、客観的なデータで発明の質を高める議論を促す(高付加価値)、まさに頼れる相談相手ですね。

ここまで具体的な活用法を見てきましたが、これらは壮大な計画のまだ第一歩にすぎません。最後に、私たちが今どこにいて、これからどこへ向かうのか、全体の地図を確認しましょう。

5. まとめ:成功への階段を一步ずつ

ここまで紹介してきた活動は、すべて「公開情報だけを使った『小さな成功体験』を積み重ねる」ための第一歩です。これは、AI 活用の旅における「レベル 1:探索・理解フェーズ」にあたります。

AI 活用の道のりは、まるで階段を一段ずつ上っていくようなものです。

1. **レベル 1:探索・理解(現在地)**: 公開情報を使い、安全な環境で AI の可能性を試す。
2. **レベル 2:業務効率化**: 定型業務に AI を本格導入し、作業を自動化・省力化する。
3. **レベル 3:戦略支援**: AI の分析力を駆使し、より高度な事業・開発戦略の意思決定を支える。
4. **レベル 4:経営統合**: AI による知財インサイトが、経営判断そのものに不可欠な要素として組み込まれる。

私たちは今、その最初のステップにいます。AIは私たちの仕事を奪うものではなく、人間の能力を拡張し、より創造的で価値のある仕事に集中させてくれる強力なパートナーです。このパートナーと共に、知財業務の明るい未来を創っていきましょう。